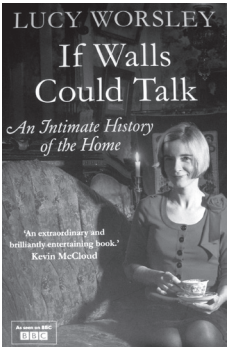
書　評



Lucy Worsley, *If Walls Could Talk: An Intimate History of the Home* (London: Faber & Faber, 2011)

辻　みどり

本書は、4 つのパート ‘An Intimate History of the Bedroom’、‘An Intimate History of the Bathroom’、‘An Intimate History of the Living Room’、‘An Intimate History of the Kitchen’ で構成されている。ペーパーバック版でもグラビア頁にカラー図版 41 点、テキスト頁にモノクロのイラストレーション 42 点が収録され、ヴィジュアルな資料を提供してくれるが、家具や室内装飾の様式の変遷を紹介することを目的とした辞典やガイドブックとは異なり、人々がベッド、風呂やトイレ、テーブル、料理用レンジ（stove）で実際に何をしたのか調査し、住居と居住空間に置かれたモノについて語る作業を通して、居住者のライフスタイルや生活文化の変遷を浮かび上がらせている。例えば、バスルームが改革された理由は技術革新ではなく、人々の清潔さへの関心の高まりであったこと、居間というのは余暇の時間と経済的余裕により存在価値が高まり、家主が来客を迎えるにあたり、自分の生活を理想化して演じる一種の舞台装置として機能したこと、さらにキッチンの変遷について語る際のキーワードは、調理器具や調理方法ではなく、食の安全、輸送技術、ジェンダー関係であるという按配である。従って Adrian Forty による名著 *Objects of Desire: Design and Society Since 1750* (1992) の切り口を居住空間全体に適用しているといえば理解されやすいと思う。

本書では、対象とする時代区分は住居の歴史や家具の歴史を遡りノルマン王朝から現代まで広く扱っているが、住居に関する大きな変化が 19 世紀に起きていることから、ヴィクトリア朝英国社会に関する記述が豊富に収録され、当時の人々の生活様式を知るための格好の参考文献となってい

る。

著者の Lucy Worsley について紹介しておこう。1973 年英国レディング生まれでカナダ育ち、帰国後オックスフォード大学ニューコレッジで歴史学を学んだ後、2001 年にサセックス大学で美術史の D.Phil を取得（テーマはニューカッスル公爵ウィリアム・キャヴェンディッシュ（1593–1676）による建築上のパトロネージ）、その後、グラスゴー美術館の学芸員を経て、キングストン大学客員教授、ロンドン大学の Institute of Historical Research の上級研究員に籍を置きつつも、ロンドン塔、ハンプトン・コート宮殿、ケンジントン宮殿などを管理する慈善団体 Historic Royal Palaces の主任キュレーターの職に就いている。

本書は、2011 年に BBC Four の 4 回シリーズとして放映された同じタイトルの番組をテキストにまとめたもので、本書の 4 部構成のテーマは、それぞれの放送回のタイトルに符合している。読者層が視聴者層と重複することを意識してか、脚注を排した読みやすい編集になっている。番組は You Tube で視聴できるが、著者は様々な歴史的邸宅や宮殿の中で専門家の説明を受け、自ら解説するだけでなく、いたずらっぽい笑みを浮かべながら、18 世紀のドレスを着こみ、ティーボウルの持ち方を教わりながらお茶を飲んで見せたり、ロンドンの街に残るガス燈の点灯を体験をしたり、時にはメイドの制服を着て奥様の寝室にお湯を運び汗をかいたかと思うと、今度は奥様の役を演じてバスに入ってみせるといった按配で、*The 1900 House* (1999 英 Channel 4 放映) や *The Edwardian Country House* (米題 *Manor House;* 2002 英 Channel 4 放映) のような視聴者参加型リアリティ番組の要素を取り込みながら、教養番組に新しい方向性を付け加えている。

著者自身、番組に関連して BBC のウェブサイト内に解説ブログを執筆するとともに自分のウェブサイトをもっているメディアミックス時代の研究者／啓発者である。建築物を中心に話が展開するので、映像のほうがスケール感や色彩・灯りの効果などについての情報伝達で勝るが、60 分×4 回の番組に編集しきれなかった夥しい量の詳細な情報および小説の引用が収録されているので、やはり書籍版を参照すべきだろう。

著書に話を戻すと、本書では住居や室内装飾の歴史的変遷が、居住者の

ライフスタイルの変遷と関連付けて語られているが、しばしば文学の世界に越境することにより、読者の理解を促している。その一つとして筆者が興味を惹かれたのは、研究の切り口を説明する場面で、著者が Henry James の *The Portrait of a Lady*（1881）を引用したことである。引用されたのは、ヨーロッパ的価値観を持つマール夫人が語る、私たちは ‘made up of some cluster of appurtenances’ という台詞、さらに appurtenances の具体例として「住居、家具、衣服、読む本、一緒にいる仲間」を挙げる個所で、人々が所持品（シニフィアン）を見て、その意味内容（シニフィエ）から他人のパーソナリティを解読しようとした 19 世紀末英国の消費社会の情況を看破したジェイムズの慧眼を示すためにしばしば引用される個所である。同じ原理を適用して自然主義小説の解読を試みた懐かしい名著、Rachel Bowlby の *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing, and Zola* (1985) を思い浮かべる人も多いかもしれない。

Worsley の視点を見ると、本書では声高に消費社会批判を唱えるのではなく、素直にモノをシニフィアンとして活用し、著者の博識によりシャーロック・ホームズの記号論のように手際よくシニフィエを解読し、文脈として当時の人々のライフスタイルを再現してみせる。従って本書では、ジェイムズの引用に続き、ラスキンが引用されている。‘Look around this room of yours and what do you see?’ 答えは ‘you see yourself’ 、すなわち、室内装飾は、その部屋の住人の内的世界の外在化であるという指摘であり、ボードリヤール風に言えば「室内装飾とその居住者とは等価である」ということになる。著者は、本文中で Thorstein Veblen の 誇示的消費の概念に言及している個所もみられる（p. 189）ように、消費社会が展開した 19 世紀末英国社会において、人々とモノの関係が詳細に複雑に定義づけられた時期に始まったモノとヒトの関係を踏まえて、住居と居住者の関係を絡め取っていこうとするスタンスであることがわかる。

ヴィクトリア朝文化研究に携わる者から興味をひかれる第 26 章について紹介しておこう。ここでは ‘A History of Clutter’ というタイトルの下に、ヴィクトリア朝における居間の変化を分析している。著者はそれを 3 点にまとめ（1）機能特化した部屋の登場（morning room, front parlour, billiard room, library など）、（2）色彩の変化（ジョージ王朝時代の明るさ・軽や

かさが消え、豊かで暗い色彩に変化)、(3) モノが増えていることが最重要であるとして、今度は Edith Wharton を引用している。さらに、ヴィクトリア朝の *drawing room* 家具一揃いとして、センターテーブル(天板にマルケットリー)、絹張の椅子 6 脚、大きい暖炉鏡が 1870 年の広告に掲載されていることを紹介しながら、それらがヴィクトリア朝の人々のマストアイテムであり、handsome, rich, massive といった形容詞のつくモノが人々の好むイメージであったことを紹介している。さらに、19 世紀後半の英国家庭でモノにあふれた状況を説明するに当たり、19 世紀後半に出版された家政マニュアル Art at Home シリーズに収録された、Lucy Orrinsmith による *The Drawing Room*(1877 初版)を引用するなど、著者の目配りは一次資料・二次資料を問わず、広く文献を網羅している。

第 26 章中盤は壁紙の説明に充てられている。居住者が住居を我が城に変える際、壁紙は「お手軽で安い居間の模様替え」であるとともに、室内装飾では家具同様の大きな構成要素となっている。著者は壁紙が 17 世紀に初登場したのち、1690 ~ 1820 の間にロンドンに 500 件以上の壁紙や paper-hanging を扱うビジネスが登場したことを説明している。一大産業となった壁紙は 1712 年には課税対象となり、1806 年には壁紙税視察官(wallpaper-tax inspectors)が壁紙の裏に押す日付スタンプの偽造が発覚し、処罰が死刑に及ぶ事件が発生したという。その後、1836 年に課税対象から外され、壁紙の種類も多様化が進んだ。

しかし、著者が壁紙から解読して見せるメタファーは、壁の問題を隠してくれる機能から容易に想像できる通り「まやかし」(deceptive)であり、壁紙を貼った部屋とは表面上の見た目のみに価値を置く浅い性格を示すとし、例として Thomas Hardy の *Far from the Madding Crowd* (1874) を挙げている。

このように著者は、美術史・建築史をベースに、歴史的建造物の現場で得られる情報や二次資料など豊富な情報を活用し、英文学史上の作品の引用を織り交ぜ、過去の人々の生活文化を再現しようと試みる。あとがきで居住空間の未来像を語りながら過去のライフスタイルへの回帰に触れ文明批判をしているが、肩の凝らない読み物として現代の生活文化と比較しながら教養を身につけることのできる本書は、ブリティッシュネスが揺らぐ

21 世紀の英国社会のマルチカルチュラルな住民たちに、英国およびヨーロッパ文化のアイデンティティを示唆する教育手段となるだろうし、過去の英国をノスタルジックに回想する市民にとっては、嬉しい参考資料となることだろう。勿論、異文化の中で成長した日本の英国文化研究者にとっては、文学作品の背景を知り、作中人物を理解するための格好の文献となることは間違いない。

嬉しいことに、早くも 2013 年 1 月 31 日には、本学会メンバーの手による邦訳が出版された（中島俊郎・玉井史絵共訳『暮らしのイギリス史――王侯から庶民まで――』NTT 出版）。カラー図版 16 頁（32 点）、訳注（20 点）及び補足図版（4 点）が加えられるとともに、こなれた文章のおかげで 364 頁の情報量も無理なく吸収できる。邦訳版は、西欧型ライフスタイルのルーツの基礎知識として、英文学・英国文化以外の専門分野の学生たちにも読んでもらいたい。